度会郡玉城町勝田

勝田遺跡発掘調査報告

1988・3

三重県教育委員会

序

県営圃場整備、道路改良、河川改修など各種の公共事業や民間の開発事業に伴う埋蔵文化財の保護の問題は、年々増加の傾向にあり、開発関係機関とのより綿密な保護調整はもとより、一般住民の理解と協力が強く望まれるところであります。

ここに報告する度会郡玉城町所在の勝田遺跡は、一般地方道度会玉城線（通称サニーロード）道路改良事業に先立ち、事前の協議の結果、発掘調査を実施し、記録保存されたもので、弥生時代末期～古墳時代初期の集落の一部が明らかとなりました。特に壁柱穴をもつ竪穴住居は県下でも類例の少ないものであり、竪穴住居構造の変遷、さらには、発生期の古墳時代の社会を考えるうえで貴重な結果が得られました。

今回の調査は、道路予定部分に限られましたが、遺跡はその周辺部にまで及んでいることは十分予想され、また継続の事業計画路線内には、まだ多くの遺跡の所在が予想されますので、今後それらの保護について関係各位の一層の配慮を願うものであります。

なお、調査にあたっては、県土木部伊勢土木事務所、玉城町教育委員会をはじめ、地元の方々の惜しみないご理解とご協力を賜りましたことに対し、深く謝意を表する次第であります。

昭和63年３月

三重県教育委員会
教育長　中林　博

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が三重県土木部から執行委任を受けて実施した一般地方道度会玉城線道路改良事業に伴う度会郡玉城町勝田に所在する勝田遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。
2．調査は、三重県教育委員会が主体となり、同文化課主事倉田直純・同併任主事東浩成が担当した。
3．発掘調査後の整理及び報告書作成は、倉田と東が行ない、文責についてはⅠを倉田、他を東が担当した。編集、写真は倉田が行なった。
4．本書の遺構表示略記号は、下記によった。
　　ＳＢ；竪穴住居、ＳＤ；溝
5．方位はすべて磁北を用いた。なお当地域の磁針方位は西偏約6°20′（昭和57年）である。

6. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前言 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 1
Ⅲ　遺構 …… 6
Ⅳ　遺物 …… 6
　1　ＳＢ１出土遺物 …… 9
　2　ＳＢ１排水溝出土遺物 …… 9
　3　ＳＢ２出土遺物 …… 9
　4　包含層出土遺物 …… 10
Ⅴ　結語 …… 10

図版目次

ＰＬ１　遺跡遠景、遺跡近景
ＰＬ２　竪穴住居ＳＢ１
ＰＬ３　竪穴住居ＳＢ２
ＰＬ４　竪穴住居ＳＢ１・ＳＢ２遺物出土状況
ＰＬ５　出土遺物

挿　　図

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡地形図
第３図　遺構実測図
第４図　遺物実測図

Ⅰ　前　　言

1．調査に至る経過

県教育委員会では、毎年、次年度以降の各種公共事業について、関係各課に事業照会をおこない、早い段階で事業計画を把握するとともに、遺跡台帳との照合、事業地内の分布調査を実施し、埋蔵文化財の保護に遺漏のないよう努めている。

こうした中で、昭和59年６月27日付、教文第755号による事業照会に対し、県土木部道路建設課から度会郡玉城町勝田字上ノ山地内で一般地方道度会玉城線道路改良工事の事業計画がある旨回答があった。当該地は、周知の上ノ山古墳群が所在する縁辺部にあたるため、早速分布調査を実施するとともに、昭和61年３月12日に試掘調査を実施した。試掘調査は路線内に２ｍ×２ｍのグリッド３ケ所、２ｍ×４ｍのグリッド２ケ所の計５ケ所を設定した。その結果、遺構は確認できなかったが、各試掘坑で土師器片の出土があり、遺跡の所在することが明らかとなったため、字名をとって勝田遺跡と呼称することとし、遺跡の取り扱いについては県教育委員会文化課と十分協議するよう道路建設課及び伊勢土木事務所に通知した。

その後勝田遺跡の保存について文化課と道路建設課との間で幾度か協議をもったが、当路線の北側延長部分は既に一部着工済であるため、遺跡部分を避ける大幅な路線変更は、困難であるとの結論に至った。そして昭和62年度中に未買収地の用地買収が完了次第、県土木部の執行委任を受けて文化課が本調査を実施することになった。調査は昭和62年９月１日から開始し、約500㎡にわたり実施した。

2．調査の方法と経過

現況は山林並びに一部鶏舎が建っていたため、まず樹木の伐採、建物撤去を行い、これと並行しながら重機による表土除去及び遺構面に影響のない範囲での伐根を行った。調査地は丘陵斜面でしかも計画道路幅約10ｍと狭いため、排土については、遺構の薄いと思われた道路センター杭より西側の斜面へ仮置きし、遺構の状況により調査区を拡張することにした。また鶏舎の建っていた場所については、予め幅１ｍのトレンチ調査を実施したところ、既に地山面が露出していることがわかり、鶏舎地造成の際削平を受けたものと判断された。そのため当初の調査面積は大幅に減少した。

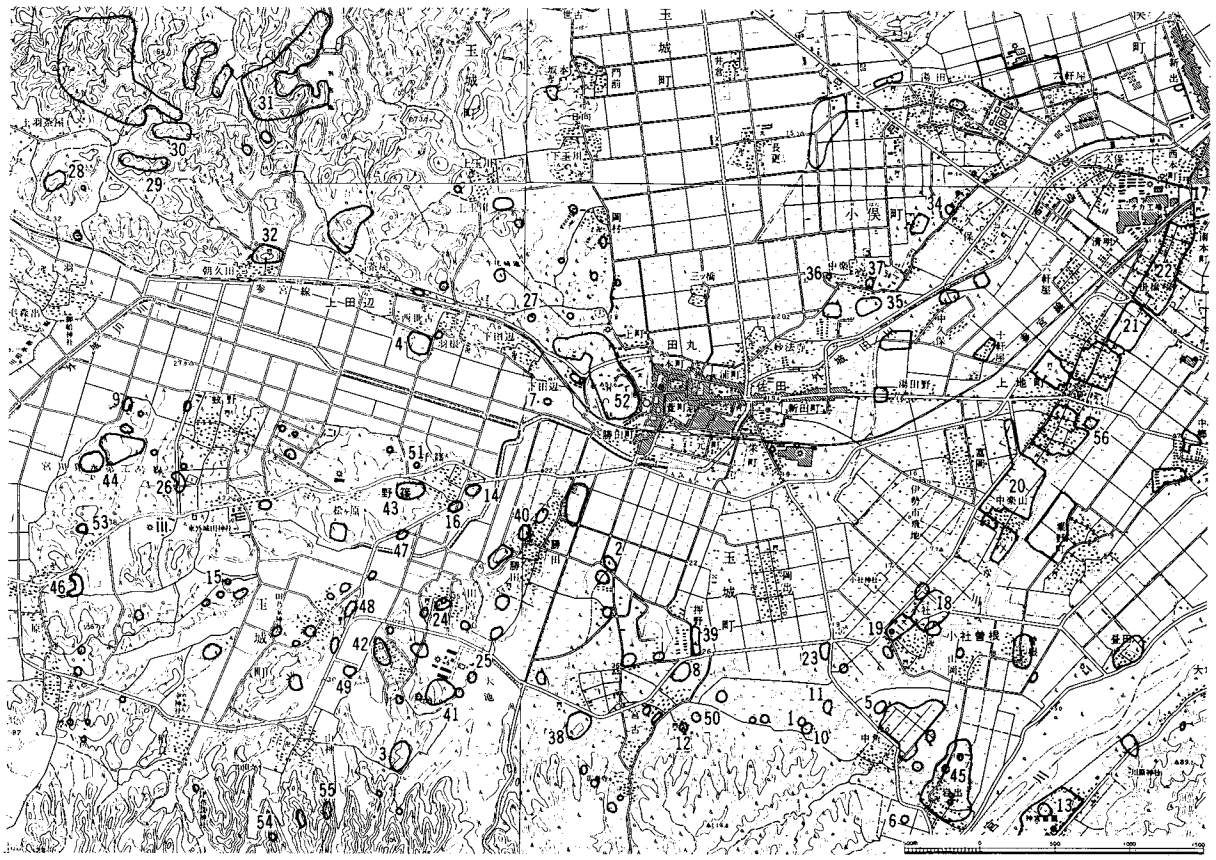
調査は計画道路の中心線を基準とした４ｍ×４ｍのグリッドを設定し、調査区北の丘陵下面から南へ向かって調査を進めた。第一次調査では主な遺構として竪穴住居１棟のみしか検出できなかったが、この住居の北側でも竪穴住居のコーナーや排水溝の一部とみられる遺構が確認されたので、この部分については、東側へ調査区を拡張した。この結果予想外に大型の竪穴住居が確認され、弥生時代後期末葉の竪穴住居群がさらに東側の丘陵部（現在鶏舎が建っている）に拡がる可能性が強いこともわかった。

Ⅱ　位置と歴史的環境

南伊勢地方の二大河川、櫛田川と宮川は大台山系に源を発し、中流域において顕著な河岸段立を形成しながら北東流し、山間部から抜け出た下流地域では、過去に幾度も流れを変え広大な氾濫平野を形成して来た。玉城町は、この二大河川にはさまれた地域にあり、町域のほぼ中央部をさらに外城田川という中小河川が貫流している。勝田遺跡は、この外城田川によって形成された氾濫平野を眼下に見下ろす国束山系から北へ派生する低丘陵上[1]の西辺部に立地する。標高は28ｍ前後で、氾濫平野である現水田面との比高は約５ｍをはかる。行政上は、度会郡玉城町大字勝田字上ノ山に属する。

当地域には、上述した様な低丘陵が発達し、旧石器時代以来人々の住居適地として盛んに利用されており、多くの遺跡が確認されている。以下、時代をおってその概略を述べる。

まず、旧石器時代の遺跡であるが、当地域は県下で最も分布が濃密な地域として知られており、その



第１図　遺跡位置図（１：50,000）（国土地理院　松阪・明野・国東山・伊勢 １：25,000）

第２図　遺跡地形図（１：5,000）

内容についても表採資料が中心とはいえ、かなり明らかになってきている[2]。中でも、上地山遺跡（1）は当地域で唯一発掘調査が行われており、県下で二例目の国府型ナイフ形石器をはじめ、チャート製の小型ナイフ形石器、舟底形石器、掻器、楔形石器、石核等が出土している[3]。当遺跡の東方約700mの東伸遺跡（2）では、ナイフ形石器数点、細石刃核2点、掻器、石核等がまとまって採集されている[4]。また、仲野遺跡（3）でも木葉形尖頭器類、ナイフ形石器、掻器等が採集されている[5]。この他にナイフ形石器が1～3点採集されている西世古遺跡（4）、アレキリ遺跡（5）、角垣内遺跡（6）や、大形の舟底形石器が単独出土したミドロ遺跡（7）が存在する。これらの遺跡は、ミドロ遺跡を除き、低平な丘陵や段丘が平野部に突き出た末端部に立地するという特徴が指摘されている[6]。

縄文時代の遺跡は、当地域周辺においては石鏃や剥片が出土した寺起遺跡（8）、えなど遺跡（9）等分布は点在的に確認されているが、土器を出土した遺跡は、狼谷遺跡（10）、明豆遺跡（11）、東村遺跡（12）とわずかである。時期的には後期が中心となるようだが[7]、詳細は明らかにし得ない。恐らく、キャンプサイト的な性格の遺跡と推定されている。これに対し、宮川を渡った右岸段丘中位面上には、岩偶の出土で著名となった佐八藤波遺跡（13）があり、後期を中心とした土器がかなりまとまって採集されている。右岸側における拠点的な集落と考えられている[8]。

弥生時代の遺跡については、当地域が比較的早くから圃場整備事業が行われたこともあって、調査例も多い。前期に遡る遺跡としては、仲垣内遺跡（14）、狼谷遺跡（10）、西世古遺跡（4）、山殿西遺跡（15）が確認されている。仲垣内遺跡では新段階に属する壷、甕等が土坑から出土している[9]。その他の遺跡についても新段階に属するものと思われる。中期では、当遺跡西方約500mの月よべ遺跡（16）の方形周溝墓から畿内第Ⅳ様式の土器が出土し[10]、上地山遺跡（1）では、第Ⅲ様式後葉の土器が出土している[11]。この他、離宮山遺跡（17）の包含層から中期中葉～後葉の[12]、小社遺跡（18）では中期後葉の土器[13]がそれぞれ出土している。後期になると遺跡数は顕著な増加を見せ、県下他地域と同様な傾向を示している。特に、宮川左岸段丘中位面上には、南からウエ松遺跡[14]（19）、小社遺跡[15]（18）、中楽山遺跡[16]（20）、野垣内遺跡[17]（21）、掛橋遺跡[18]（22）といった大規模な遺跡がほぼ帯状に並んで形成されていく。これらは、小社遺跡と掛橋遺跡を除いて発掘調査が行なわれ、竪穴住居や方形周溝墓が検出されており、いずれも欠山～元屋敷期を中心とした集落址と考えられる。前二者についても、採集資料を見る限り同時期が中心になると思われ、当地域は弥生時代後期でも末頃から古墳時代初頭にかけて安定的な集落形成が行われたことが推定される。この他に、時期は特定出来ないが、杉山遺跡（23）、田宮寺遺跡（24）、大池遺跡（25）、さみだれ遺跡（26）では石包丁が採集されており、付近の低丘陵上に点々と住居の跡が残されている。

古墳時代初頭以降、先述した弥生時代末からの大集落はあたかも歩調を合わせたかの如く一斉に解体し、拡散していったものとおもわれる[19]。しかし、該期の集落址はほとんど調査例がなく、散発的に遺物の出土を見るのみで具体相は全く把握し得ない。ただ、上述のような集落解体の在り方の中に、新しい時代のうねりが当地域にも押し寄せたことを垣間見るのみである。このように、集落址が全く不明といった状況とは対照的に、古墳（群）の形成は、5世紀前半以降極めて活発な展開をみせている[20]。4世紀代に遡るものとしては、小社遺跡（18）採集の石釧[21]と下田辺茶臼山古墳[22]（27）の台付壷が注目されているが、いずれも偶然の出土によるもので、不明と言わざるを得ない。

さて、当地域周辺の古墳分布を巨視的に分類して見ると、櫛田川と外城田川にはさまれた玉城丘陵に存在するもの＝A地区、国束山系から外城田川へ向かって北へ派生する丘陵上に存在するもの＝B地区、外城田川両岸の中位段丘面上に存在するもの＝C地区、汁谷川（旧宮川）左岸の中位段丘面上に存在するもの＝D地区、とすることができる。A地区は当地域で最も早く古墳が形成さた地域で、前Ⅲ期の権現山2号墳（28）を端著とし、以後急速に古墳群形成が進む。本地区の中には中山古墳群（29）やゆぶみ古墳群（30）、斎宮池古墳群（31）のように、群

中に前方後円墳で全長30m以上の盟主墳的存在を含み、各墳が比較的疎らに群形成している「散在型」と、朝久田古墳群（32）、上田辺古墳群（33）のように一定範囲に各墳が接するように群形成をしている。「密集型」の二つのタイプが存在しているようである[23]。

この「散在型」には、C地区で最近発見された前方後円墳、野田古墳[24]（34）－全長33.5mを含めた茶臼山塚古墳群（35）、塚田古墳（36）、豆塚古墳群（37）の一群も該当しようか。

このような二つのタイプの群集墳を含むA地区に対し、B地区においては前方後円墳は現在一基も確認されていないだけでなく、30m以上の規模を持つ古墳も見当たらない。つまり、上記分類の「散在型」群集墳は見られず、矢塚古墳群（38）、鉄砲塚古墳群（39）、八柱神社古墳群（40）、前岡古墳群（41）、空池古墳群（42）、正来寺古墳群（43）、ぼうず山A、B古墳群（44）といった規模10m前後で、10基前後の円墳から成る「密集型」の群集墳が顕著にみられる。これらは恐らく、6世紀後半以降に形成された共同体の集団墓的性格の強いものと考えられる。

歴史時代の当地域を考える上で、伊勢神宮との関連を見逃すことはできない。玉城町の属する旧度会郡は13郷から成り、神三郡の一つとして神宮鎮座以来神領地とされてきた。うち、当地域周辺は城田郷、田辺郷と湯田郷の一部を含み、神宮の摂末社が集中している。また、内宮の禰宜であった荒木田氏はこの3郷を本拠地にしていたと推定され、氏神である小社湯田野社、田辺社や氏寺の田宮寺などが存在している。しかし、このような文献史学上の成果と考古学上の調査成果は、調査例が少ないこともあって整合的に捉えられないのが現状であり、今後究明すべき重要な課題と言える。こうした中にあって、斎王参宮の際の離宮であり、太神宮司政庁と度会駅家の機能をも備えた離宮院跡（17）は、発掘調査よって当時の様相の一端を窺い得た例として貴重であり、八脚門址の検出等、特筆すべき成果が見られた[25]。この他、文献上の記載と一致する神宮関連の遺跡として、長暦2年（1038）以降約400年間にわたって神宮祭主大中臣氏が居を構えた岩出遺跡[26]（45）がある。

飛鳥・奈良時代の遺跡としては、原古窯址群（46）をあげることができる。本古窯址群は県下古窯址中最南部に位置する外城田古窯址群と総称されるものの一部に含まれ、全10基より成る。うち、6・7号窯が調査され、7世紀末～8世紀初頭の杯、長頸壷等が出土している[27]。従って、当然これらの生産に直接従事した工人、或いは生産を招来する背景となった勢力に関連する遺跡が、周辺に存在することが予想されるが、現時点では明らかにし得ない。前記した古墳（群）の被葬者、造営者であった人々との関連の有無等、興味深い問題が横たわっている。

平安時代の遺跡としては、上記の神宮関連の遺跡の他に、野垣内遺跡（22）、赤垣内遺跡（47）、小ばし遺跡（48）等があげられる。野垣内遺跡では掘立建物5棟の他、同時期の竪穴住居も見つかっており[28]、当時の一般庶民の暮らしぶりをみることができる。また赤垣内遺跡では平安末頃の総柱建物を含む掘立柱建物が検出され[29]、小ばし遺跡では土製支脚の出土が注目される[30]。

中世の遺跡は各地に点在しており、立地傾向として城館等を除けば、やはり低丘陵上及び端部、段丘中位面上に存在するものが多く、氾濫平野にはほとんど見られないと言える。従って、現在の集落と重なる部分もかなりあると考えられ、現に古くからの開発、開墾に伴って遺物がしばしば出土している。例をあげれば、ヒムロ遺跡（49）出土の山茶椀や土師器鍋、中世墓の可能性の高い平内山遺跡（50）、鳥取山遺跡[31]（51）の常滑焼壷や土師器鍋[32]、宮古地区の開発に伴って出土した渥美産（？）の壷等[33]、枚挙にいとまがない程である。

中世城館には田丸城址（52）、坊主山館址（53）、山神城址（54）、山上東城址（55）、岩出城址（45）、寺山城址（56）がある。田丸城址は延元元年（1336）、北畠親房、顕信父子が築城して以来、南朝方の拠点となり、南北両朝合一後も北畠国司の支配下に置かれた。永禄12年（1596）には織田信長の大河内城攻めの際の和議によって、次男信雄が城主となり、以後堀、石垣、土塁を備えた近世的平山城として生まれ変わる。江戸時代には、和歌山藩家老の久野家が城主となり、八代続いて明治の廃城を迎える[34]。岩

出城址は大中臣氏が居を構えた後、天正3年（1575）田丸具直が築城し、以後慶長5年（1600）まで存続する[35]。山神城址[36]、山上東城址[37]はその田丸家々臣山岡氏一党が拠ったと伝えられている。寺山城址については、城主等は不明である。

以上、勝田遺跡周辺の歴史的環境について考古学的成果を中心に述べた。羅列的で、ほんの一部分を述べたにすぎないが、当地域が旧石器時代以来、多様な歴史を展開して来たことがわかる。

〔註〕

（1）地形的には低丘陵であるが、地質成因的には、赤褐色粘質土の地山の下に礫層が確認されることから、上位段丘であることが解る。

（2）a、奥義次「三重県の遺跡」『日本の旧石器文化3』1976年

b、同前「三重県の先土器時代関連遺跡地名表」『上地山遺跡発掘調査報告書』1985年　玉城町教育委員会

c、同前「第二章参考資料－宮川流域周辺の先史遺跡と遺物－」『大宮町史歴史編』1987年　大宮町

（3）註（2）b文献に同じ

（4）皇学館大学考古学研究会『玉城町南部の遺跡』1982年

（5）註（4）文献に同じ

（6）註（2）a文献に同じ

（7）註（2）c文献に同じ

（8）岩中淳之『三重県伊勢市遺跡分布地図』1981年　伊勢市教育委員会

（9）小玉道明「度会郡玉城町仲垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1979年　三重県教育委員会

（10）小玉道明・長谷川博「度会郡玉城町月よべ遺跡」同上

（11）奥義次・大西素行・御村精治『上地山遺跡発掘調査報告書』1985年玉城町教育委員会

（12）御村精治・榎本義譲・山沢義貴・小玉道明『離宮院跡発掘調査報告』1980年　小俣町教育委員会

（13）註（4）文献に同じ

（14）調査担当者大西素行氏の御教示による。

（15）村山邦彦「小社遺跡」『歩跡』2号 1972年　皇学館大学考古学研究会

（16）下村登良男「伊勢市上地町中楽山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1973年　三重県教育委員会

（17）同上「伊勢市上地町野垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1979年　三重県教育委員会

（18）皇学館大学考古学研究会『小俣町の遺跡』1985年

（19）玉城町赤垣内遺跡及び仲垣内遺跡の調査において、古墳時代後期と推定される竪穴住居が計4棟検出されている。この例を参考にするならば、周辺に分散的に小規模な集落が形成されていたということも推測可能と思われる。
小玉道明「度会郡玉城町赤垣内遺跡」、同前「仲垣内遺跡」1979年。註（17）文献所収。

（20）a、下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』1986年　多気町教育委員会

b、前川嘉宏「玉城丘陵上の古墳群について」『ふびと』36号1979年　三重大学歴史研究会

c、註（4）文献に同じ
以下各古墳（群）の規模・形態等の記述については上記文献に拠る所が大きい。

（21）註（4）文献に同じ

（22）註（20）b文献に同じ

（23）註（20）a文献に同じ　このような類型の設定も同書の指摘に拠る所が大きい。

（24）註（20）文献に同じ　同書に拠れば、本墳周辺には他にも、かつていくつかの塚が存在していたらしく、現在それらは消滅していることを指摘している。

（25）註（12）文献に同じ

（26）瀬古吉久他「岩出の遺跡」『歩跡』3号 1976年　皇学館大学考古学研究会

（27）三重大学原始古代史部会「度会郡玉城町原6号・7号窯発掘略報」『ふびと』22号 1964年　三重大学歴史研究会

（28）註（17）文献に同じ

（29）註（19）文献に同じ

（30）下村登良男「度会郡玉城町小ばし遺跡」註（17）文献所収

（31）註（4）文献に同じ

（32）註（4）文献に同じ

（33）註（4）文献に同じ

（34）『三重県の地名』日本歴史地名大系24　1983年

（35）註（26）文献に同じ

（36）西村忠之「山神城」『三重の中世城館』1976年　三重県教育委員会

（37）三重県教育委員会「三重の中世城館補遺」『三重県埋蔵文化財包蔵地一覧表（5）』1981年　三重県教育委員会

Ⅲ 遺　　構

遺跡の層序は基本的に、上より第Ⅰ層：表土、第Ⅱ層：淡茶褐色土、第Ⅲ層：黒褐色土、そして赤褐色粘質土の地山となっている。第Ⅱ層にも遺物が少量認められるが、第Ⅲ層がいわゆる遺物包含層と考えられる。層厚は平均20cm前後である。但し調査区北側の谷筋に当たる最も低い部分では、50cm以上と厚く堆積しており、遺物はみられなかった。これは恐らく、尾根部分からの流れ込みが堆積したものと思われる。同様に南側の谷筋でも黒褐色土は厚くなり、ここではその下に第Ⅳ層の明黄褐色粘質土が30cm前後の厚さで堆積し、地山となる。さらに、今回遺構の見つかった尾根部分は、昭和36年頃に現鶏舎建設の為、赤褐色砂礫土の盛土をしており、これは尾根高所部分を削平して盛土したものであるという所有者の言であった。

遺構は第Ⅲ層を切り込んでいるが、地山面において初めて確認出来るという状態であった。検出された遺構は、時期不明の溝２条と竪穴住居２棟及びそれに付随する排水溝である。以下、その概略を記す。

ＳＢ１．調査区のほぼ中央部で検出されたもので、地形的には尾根先端部の調査区最高所に立地する。東隅が調査区外にあるが、南北6.2m、東西7.5mの比較的規模の大きいもので、南北軸はN29° Wとなる。周溝は斜面低位側を除いた東、南、西辺に「コ」の字状にめぐり、幅30cm前後、深さは床面側から10cm前後を計る。中央に長径90cm、深さ12cmの浅い土坑があり、埋土に多量の炭化物が混じっていた。床面は三ケ所で焼けた跡があり、うち北東隅近くのものが最もよく焼けていた。主柱穴は径30cm、深さ55cmのものが南側に２ケ所あるが、北側は木根の撹乱等で検出できなかった。東辺側に幅90cm、確認し得た長さ2.8m、比高５cmの台状部があり、ベッド状遺構の可能性がある。また東、西辺壁際にいわゆる壁柱穴が計７ケ所明瞭に認められた。いずれも、径25cm前後で外壁を10cm前後切り込んでおり、深さは周溝底より10cm程度掘り込んでいる。また、南隅からは暗渠排水溝が西に向かって3.7m程のび、途中で等高線に直交する形で北に折れ曲がる。

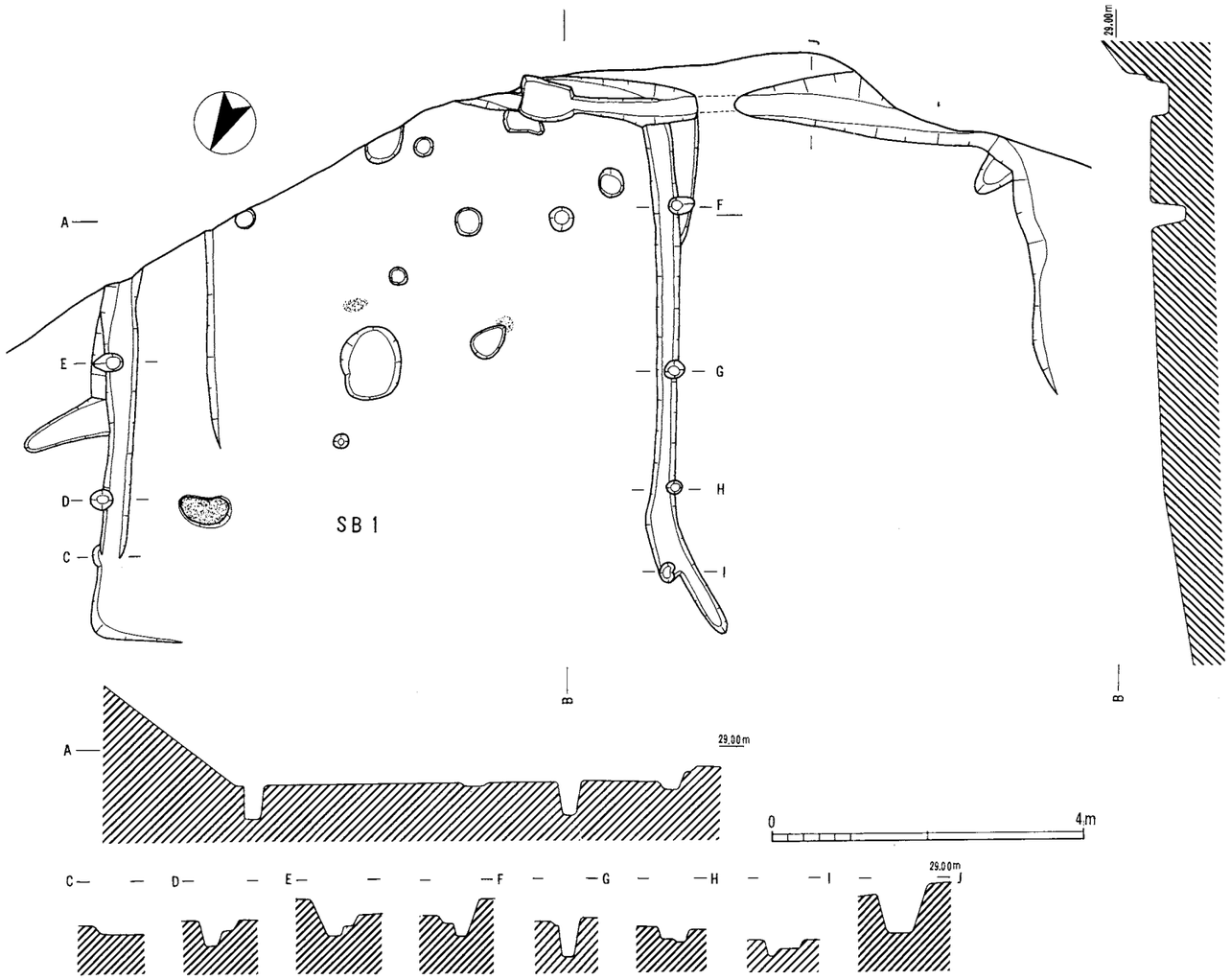
ＳＢ２　調査区の中央やや南寄り、ＳＢ１から６m程離れた所で見つかった。地形的には尾根の西斜面側に立地する。規模は東辺が4.4m、北辺が4.2mでＳＢ１同様斜面低位側を除く三辺に、幅30cm、床面からの深さ10cm程の周溝が「コ」の字状にめぐる隅円方形を呈する。南北軸はN44° Wである。主柱穴が四隅に存在し、いずれも径25cm、深さ50cm前後とよく揃っている。床面の中央西寄りが90×50cmの広さでよく焼けていた。本住居址も北辺に４ケ所、東辺に３ケ所、南辺に３ケ所、壁柱穴が明瞭に残っていた。径20cm、深さは周溝底から５cm前後で、ＳＢ１の例より一回り小さく、間隔も不揃いである。また西隅から幅20cm、深さ10cmの溝が、80cm程延びて途切れる。これも等高線にほぼ直交するので、排水溝と考えられる。

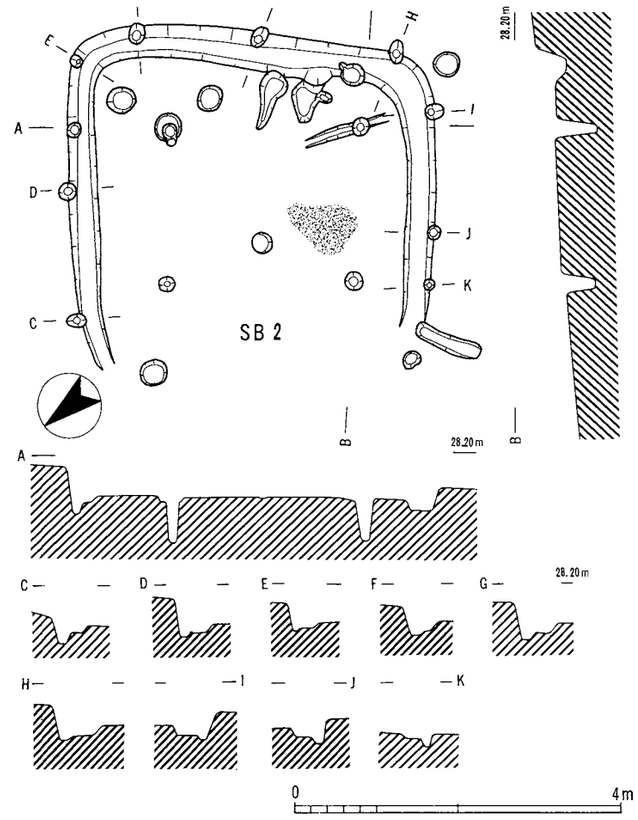
ＳＤ３　調査区の北端近くで検出されたほぼ南北方向に走る最大幅は1.7m、深さ15cmの浅い溝で、南から北へ緩やかに傾斜する。埋土は小礫を混入する黒褐色土で、土器片数点を出土したのみであった。

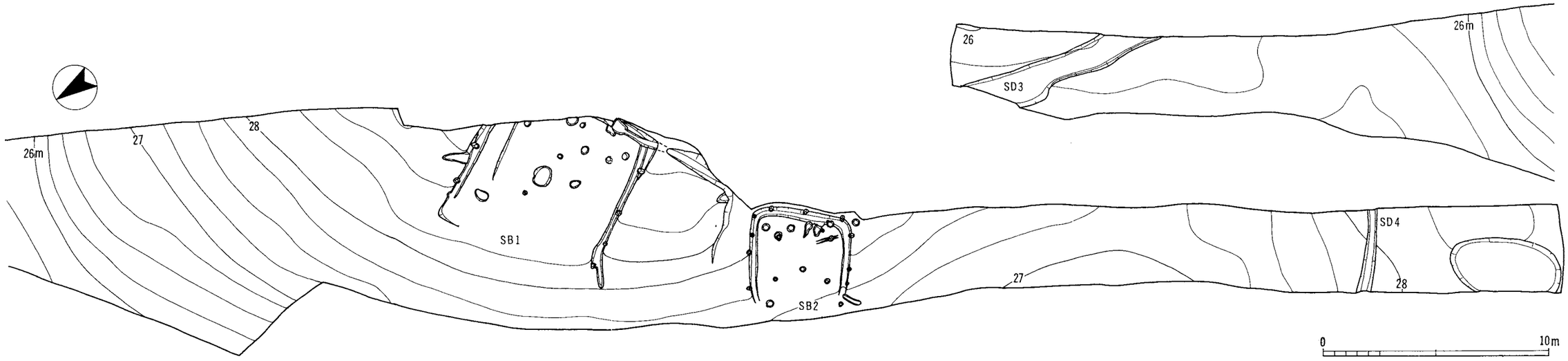
ＳＤ４　住居址が検出された尾根と浅い谷を隔てた南側の尾根の東斜面で検出された。調査区を縦断する形で、旧地形で言えば尾根と並行する方向で、東南から西北へ緩やかに傾斜する。幅40cm、深さ15cmの断面逆台形を呈する浅い溝である。埋土は暗茶褐色土で、土器片数点が出土したのみである。

Ⅳ 遺　　物

遺物は整理箱に５箱程度と少なく、それらの多くは細片のため図示し得なかった。また丘陵上の遺跡のためか、保存状況も悪く、詳細な器面の観察に耐えるものが少なかったことをあらかじめ断っておきたい。以下、遺構毎に個々の遺物について述べることとする。







第３図　上：遺構実測図 ＳＢ１・ＳＢ２（１：80）　　下：遺構測量図（１：200）

（1）ＳＢ１出土遺物（１～６）

広口壷（１）　住居内南片中央部の小土坑より出土したものである。口頸部が外方へ開きながらほぼまっ直ぐ伸び、端部付近でさらに強く外反する。口縁端部は丸く終わる。口頸部外面下半は細かいハケ目調整で、上半から内面にかけてはナデと思われる。体部と口頸部の接合部内面に指頭圧痕が残る。口径13.3cm、色調は淡黄褐色を呈し、胎土に白色砂粒を混える。

台付甕（５）　（１）と同じ小土坑から出土したもの。台部はわずかに内弯しながら外方へ開き、端部は内側にわずかに突出する。外面は細かいハケ目調整で、内面は指頭圧痕が認められる。体部外面は深く荒いハケ目調整である。台端部径8.2cm 、色調は淡茶褐色で胎土に砂粒を多量に含む。

小型鉢（２、３）（２）は平らな底部から内弯する体部がのび、途中で外反して口縁部をなすもので、口縁端部は尖り気味に終わる。底部から体部内面にかけてナデアゲ調整されている。口径9.6cm、色調は淡黄灰色で胎土に砂粒を含む。（３）は上げ底の底部に半球形の体部がつくもので口縁端部はわずかに外面にふくらむ。底部外面に指頭圧痕、内面にハケ状工具によるナデが認められる。口径9.6cm、色調は赤黄褐色で、胎土には多量の砂粒を含む。

小型甕（４）　体部外面に右上がりの叩き目を有するもので、外傾する短い口縁を有し、口縁端部は丸く終わる。口径10.9cm、色調は淡茶褐色で胎土は砂粒を多く含む。

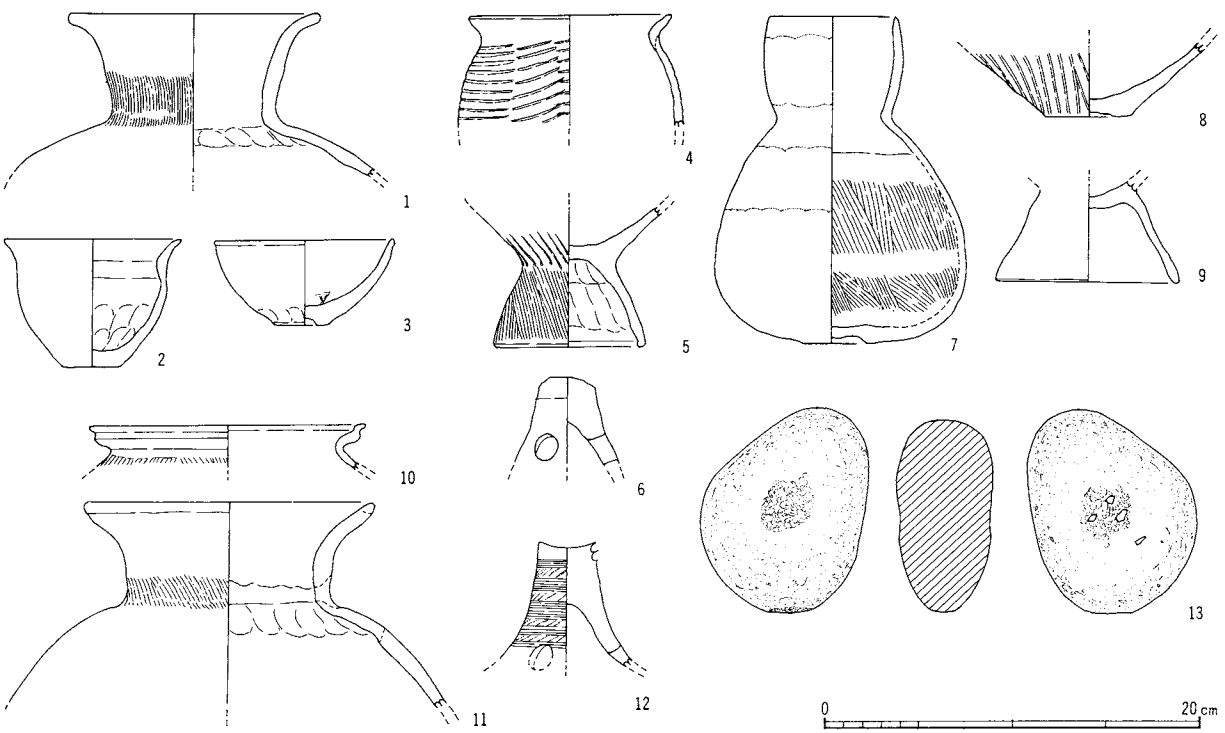
高杯（６）　埋土から出土したもので、円形の透しを三方に有する。色調は淡黄褐色で胎土は良好。

（２）ＳＢ１排水溝出土遺物（11）

広口壷（11）　排水溝が北へ折れ曲がる付近の埋土内から出土した。口頸部はほぼ直立し中位で強く外反する。口縁部は丸く終わる。口頸部と体部の接合部に明瞭な粘土の継ぎ目が見られる。調整は口頸部下半が細かいハケ目調整で上半から内面にかけてはヨコナデ調整と思われる。体部外面は不明、内面の上端は指頭圧痕が見られる。調整、器形ともＳＢ１小土坑出土の広口壷（１）に類似点が多い。口径15.2cm、色調は肌色で、胎土は白色微砂粒を含む。

（３）ＳＢ２出土遺物（７～９、13）

直口壷（７）　床面直上からほぼ完形で出土した。いわゆる「ヒサゴ壷」である。小さな上げ底の底部から下半部約１／３程に最大径を有する無果花形の体部が続き、その上に内弯しながら立つ小さめ目の口頸部がのる。口縁端部は内面を強めにナデて尖り



第４図　遺物実測図（１：４）

気味に整形している。口頸部の上下に二条、体部上半に二条、繊細な列点の連弧文がめぐる。調整は全体に薄手の作りで、外面全体は不明。内面は底部がハケ状工具によるナデ、体部が斜位のハケ目である。口径6.7cm、高さ17.3cm、色調は淡赤黄褐色で胎土に微砂粒を若干含む。

壷（8）　広口壷の底部と思われるもの。上げ底で外面に荒いハケ目が残る。色調は淡黄褐色で胎土に砂粒を多く含む。

台付甕（9）　開き気味の台部で端部は丸く終わる。調整は不明だが指によるナデか。二次的焼成を受けており、赤化した茶褐色を呈す。台端部径9.2cm、胎土は白色の微砂粒を含む。

敲石（13）　表裏両面と周縁の下端に潰痕が見られる。長径11.0cm、4.9cmで硬砂岩製と思われる。

（4）包含層出土遺物（10、12）

S字状口縁台付甕（10）　SB1上から出土したもので、或いはSB1の埋土内の可能性も考えられるが、包含層出土として扱っておく。体部から口縁部への屈曲は比較的鋭い。口縁部下段が厚いのに対し、上段は薄めで突出も小さい。口縁端部上面は平坦に仕上げられる。体部にはハケ目がわずかに残っている。口径14.8cmだが、小片からの復元のため信頼性は低い。色調は黄褐色で、胎土に砂粒を含む。

高杯（12）　脚部のみで「ハ」の字状に開く。櫛描横線が円孔より上部に5条めぐり、その間に横線と同一原体と思われる工具による刺穴列点文を配する。内外面の調整は不明。脚部最上部径2.9cm色調は赤褐色で胎土は砂粒をほとんど含まず良好。

V　結　　語

今回の調査は道路買収用地部分のみで、幅も地形等の制約により4～10mと狭いものとなった。従って検出し得た遺構・遺物もわずかであり、それらから多くのことを語ることはできないが、以下に二、三の問題点や当遺跡の有する歴史的位置等にふれて、まとめとしたい。

先ず遺物についてであるが、少量で器種が限られているという制約から、編年的位置付けについても不確定な要素が多い。しかしながら一部、明確な特色を持つ点もあり、それらを手掛かりに検討を加えてみたい。

SB1出土の土器については、広口壷（1）が全く無文で端部が丸く終わるものであり、これと共に台付甕（5）が一括して小土坑から出土している。台付甕は残念ながら脚部のみであるが、台端部が折り返されないものである。このような形態は、比較的古いタイプのものと思われ、いわゆる定型化したS字状口縁台付甕の最も古いタイプか、もしくはそれ以前のものと考えられる。しかし、一括出土の広口壷が新しい特徴を持つものであり、前記の点を考慮しつつ、これらの土器の編年的位置を求めるならば、中楽山遺跡SX1出土の一群より若干新しい様相のものとするのが妥当と思われる。中楽山SX1出土土器は伊勢湾西岸地域における該期の標式的な土器群で、従来の尾張・三河地域における編年との併行関係は欠山式でも新しい段階に相当すると言われている[1]。従って、SB1出土土器は大参編年の元屋敷期に該当するものであろう[2]。そう考えれば、量的に少ない土器の中で目立つ小型鉢（2、3）の存在もスムーズに理解出来よう。ただ、近年、欠山式前後の土器については尾張地方の研究者を中心に急速に研究が進められ、特に赤塚次郎氏は“S字甕”を様式設定の基準にすえ、従来の欠山式新段階を同氏の言う「元屋敷様式」に包括した編年案を示されている[3]。同氏の編年案が伊勢湾西岸地域においても妥当性をもつものかどうかは、今後の検証に待つとしても、大筋では大きな変動はないと思われ、今、その編年案に従って言うならば、「元屋敷様式前期」に属し、“S字甕”B類の段階に相当しよう。SB1排水溝出土の広口壷（11）も同時期と考えたい。

さて、ここでSB1出土の他の土器に目を向けると、叩き技法により製作された甕（4）の存在が注目される。これが搬入品であるか否かは別としても、明らかに他地域＝畿内地方との交流の所産であり、このような現象は赤塚氏によれば尾張地方において

も“S字甕”B類の段階にわずかに存在するという[4]。伊勢湾西岸地域、当遺跡周辺の南伊勢地方においては、前出の中楽山SX1から3点、野垣内遺跡SX23から1点[5]“叩き甕”が出土している。前者は先述の如く、欠山式新段階併行であり、赤塚編年の“S字甕”A類の段階に当たり、後者は同B類の段階に当たると考えられる。とするならば、当地方では尾張地方より一段階早い時期に交流が行われていたことが示唆されるが、いずれにせよ赤塚編年「元屋敷様式前期」の時期に当地方では、微量の出土ながら普遍的に畿内との交流が行われていたことを推測させる。と同時に、この時期は伊勢湾沿岸各地において、土器交流の上で一つの画期であったことが、当地方の様相からも確認し得る。

SB2出土土器は何と言ってもヒサゴ壷（7）が一つの目安となる。この土器を基準に考えて併行する土器群を周辺地域に求めると、中楽山SX1のものがやはり相当しよう。中楽山SX1は納所編年の古墳時代第I期に位置つけられるが[6]、納所報告ではこのヒサゴ壷（7）に施文原理まで酷似した同遺跡出土のヒサゴ壷をやはり古墳時代第I期に比定しており[7]、先に述べた本土器の編年的位置付けで、ほぼ確定出来ると思われる。赤塚編年で言えば、「元屋敷様式前期」で、“S字甕”A類の段階に相当し、SB1出土土器より一段階古いものと言える。

次に検出された遺構についてのべてみたい。2棟の竪穴住居には、いずれも明瞭に壁柱穴が確認された。壁柱穴そのもはのは壁留材を支えた杭穴と考えられ[8]、全国的に見るとさして珍しいものではないようであるが、伊勢湾西岸地域においては検出例は稀少である。筆者が具体的に知り得た例としては、松阪市草山遺跡のものがある。同遺跡は当遺跡と同様に、低丘陵上に営まれた欠山期を中心とする集落跡であるが、86棟の竪穴住居のうち9棟で壁柱穴が確認され、その形態は4種類（全周、3辺、対応する2辺、コーナーのみ）あるとされている[9]。本報告が公刊されていない現時点では、同時存在の住居に占める割合、建物規模との関係等詳細は不明であるが、数的な比率から単純に考えてこの時期の住居構造としては決して一般的なものであるとは言い難い。同じ南伊勢地方の同時期の集落である中楽山[10]、野垣内両遺跡[11]では壁柱穴を有する例は見当たらない。また、草山、当遺跡両例をかんがえてみても、建物規模の大小とは無関係と思われ、このような住居構造の採用が何に起因するのか、現時点では全く不明と言う他はない。今後、検出例が増え研究が進むことを期待したい。

同様にSB1で検出されたベッド状遺構と推定したものついても、伊勢湾西岸地域においては実態は不明な部分が多い。管見に触れた例では四日市市東日野遺跡[12]と津市新畑遺跡[13]の2例があげられる。前者はやや疑問な部分が多いが、後者は周溝に沿って「L」字状に高い部分が設けられた明瞭なものである。このような遺構は、弥生時代中期後半から古墳時代中期に主に西日本に認められるという[14]。当遺跡例も含めた3例はいずれも古墳時代前期に属するが、この時期は先にも述べたように土器交流が非常に活発化する時期でもある。とするならば、このような遺構もそうした交流を背景に畿内地方を通じて西日本からもたらされた可能性を想定出来るが、現時点では断定的なことは言えず、やはり類例の蓄積が必要である。

以上のように、今回検出された竪穴住居はわずか2棟とはいえ、非常に特色あるもので当該期の住居の構造を探る上で、貴重な事実を示したと言えよう。それ以上に、今後の調査に多くの課題を提起することになったと言うことが出来る。

最後に、これまで述べて来たことを踏まえ、周辺の遺跡の動向等も考慮に入れつつ、いささか予察的となるかも知れないが、勝田遺跡の有する歴史的性格に迫るべく、思いつく所を述べてみたい。

勝田遺跡は全面に沖積平野の広がる低丘陵上に営まれた、弥生時代後期終末から古墳時代初頭にかけての集落址である。検出された遺構・遺物は少ないものであったが、これは冒頭でも述べたように調査範囲が限定されたことに加えて、調査地点も丘陵平坦部の西端と傾斜部にかかっていたことに起因する。恐らく、この地点は遺跡範囲の西端に当たり、本来“ムラ”の中心部分は東側の丘陵平坦面に広がっているものと推定される。「位置と歴史的環境」の項でも述べたが、付近にはこのような低丘陵が発達しており、弥生～古墳時代に限っても、前期新段階以

来、断続的に集落が営まれている。

一方で弥生時代後期も後半になると、新しく大規模な集落が宮川左岸段丘上に出現し、新たな展開が見られる。今回の調査によって、この時期の集落立地に、こうした二通りの在り方が見られることが判明した。こうした集落立地の対比の中に、後期以降の生産力の増大を背景にして丘陵を離れ、より広大な水田可耕地たる沖積平野を控えた場所に、新たに“ムラ”を求め、営んでいった人々と、そうせずに伝統的な場所に残った人々の姿を見ると言えば大胆に過ぎるであろうか。勝田遺跡は、そうした低丘陵上に居を構えた“伝統的集落”の一つであると考えられる。

しかし、同じ頃（“Ｓ字甕”Ａ類の段階[15]）に尾張地方では既に、湿原に営まれた拠点的大集落が解体して行くという[16]。この地域では、前記したような大集落がほぼ出現するのであり、それらが解体して行くのは少なくとも次の段階（“Ｓ字甕”Ｂ類[17]）であって、集落展開の上ではズレがあることが指摘出来よう。そのような動きは、畿内を中心とした新しい時代の胎動であり、この地域での集落の様相を探るのは、現時点では勝田遺跡ＳＢ１の他、あまりにも少なく、空白と言え、今後の調査の進展に待つところが大きいといわざるを得ない。

註

（１）下村登良男「伊勢市上地町中楽山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』1973年　三重県教育委員会

（２）大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』ＸＬⅡ　1968年

（３）赤塚次郎「逍遥する土器」『欠山式土器とその前後　研究・報告編』　1987年　愛知考古学談話会及び「“Ｓ字甕”覚書‘85』『年報』昭和60年度愛知県埋蔵文化財センター

（４）註（３）に同じ

（５）下村登良男「伊勢市上地町野垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書』1979年　三重県教育委員会

（６）伊藤久嗣『納所遺跡　遺構と遺物』　1980年　三重県教育委員会

（７）註（６）に同じ

（８）石野博信「考古学から見た古代日本の住居」『日本古代文化の探究　家』　1975年　社思想社

（９）松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報』Ｎｏ．５　1983年　松阪市教育委員会

(10) 註（１）に同じ

(11) 註（５）に同じ

(12) 註（８）文献及び、小玉道明「東日野弥生住居址群」『四日市市埋蔵文化財調査報告』第一集　1976年四日市市教育委員会

(13) 吉村利男『新畑遺跡発掘調査報告』　1973年　新畑遺跡発掘調査団

(14) 註（８）に同じ

(15) 註（３）文献に同じ

(16) 註（３）文献に同じ

(17) 註（３）文献に同じ

図　　版

遺跡遠景（北から）

遺跡近景（北から）

竪穴住居 SB1（南西から）

竪穴住居 SB1 貯蔵穴・周溝・暗梁・壁柱穴（東から）

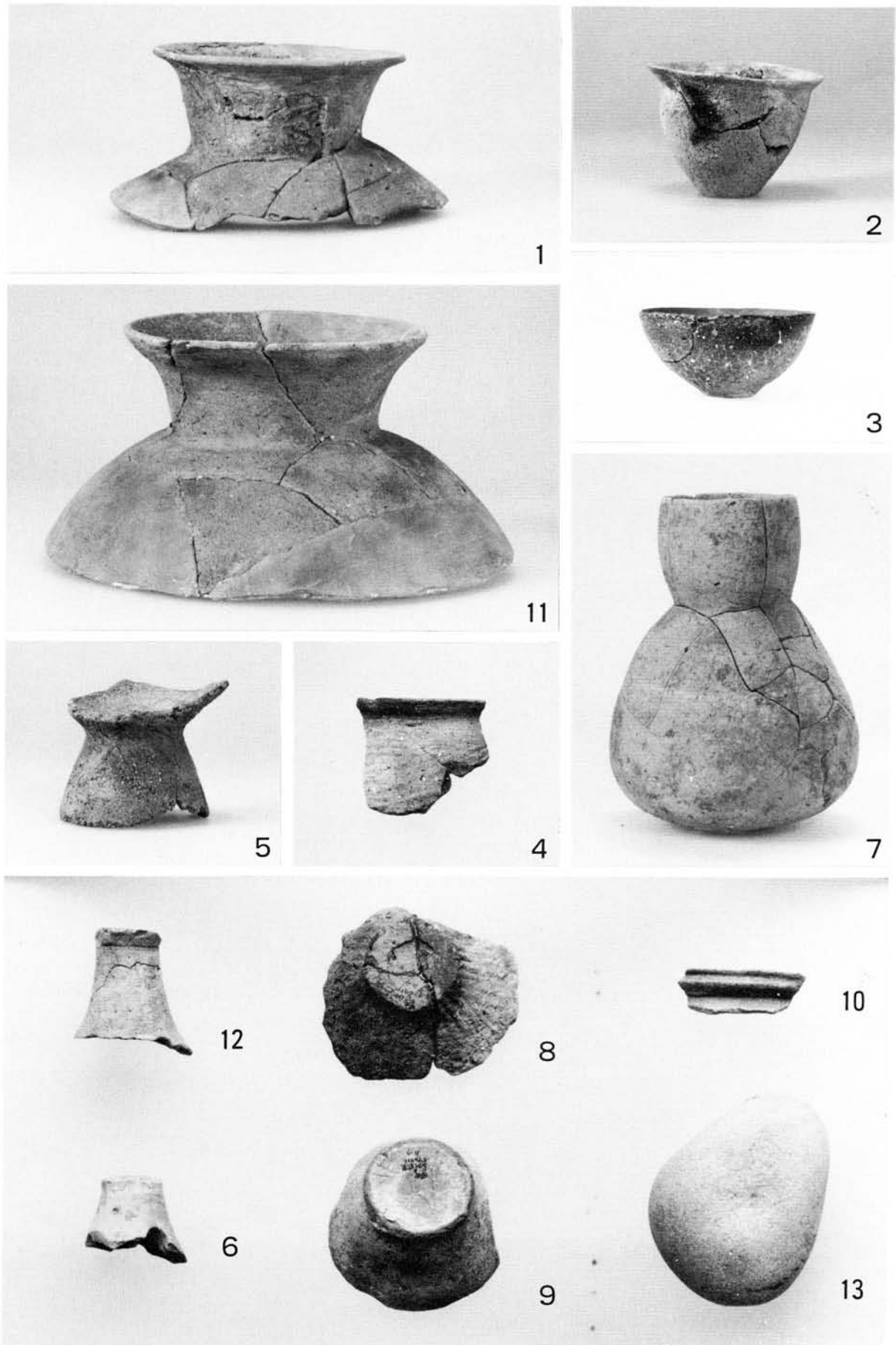
竪穴住居 SB2（南から）

竪穴住居 SB2（西から）

竪穴住居 SB1 土坑内遺物出土状況

竪穴住居 SB2 床面遺物出土状況

竪穴住居 SB2 周溝内遺物出土状況



出土遺物（1：3）

昭和63(1988)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 82

勝田遺跡発掘調査報告

1988年3月31日

編集
発行　三重県教育委員会

印刷　㈲第一プリント社